

本多静六通信

第29号

発行
本多静六博士
を顕彰する会

明治神宮 百年の森で未来を想う

「先人」の志を継ぐ二つの試みから

明治神宮国際神道文化研究所主任研究員 今泉 宜子

はじめに

明治神宮では、令和二年十月三十一日から十一月四日までの五日間にわたり鎮座百年大祭が執り行われました。新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、賑々しい記念行事や式典は中止を余儀なくされましたが、大祭に先立つ十月二十八日には、天皇皇后両陛下、上皇皇后陛下、秋篠宮皇嗣同妃両殿下の御参拝の栄を賜りました。また、鎮座百年祭にあたり天皇皇后両陛下より、次のような御製御歌を賜りました。

御製
百年の世のうつろひをみまもりし
御社は建つ明治の杜に
御歌

木々さやぐ豊けき杜の御社に
参りて明治の御代を偲びぬ

本多静六達の手により、この明治の森が誕生してから百年(図1)。次の百年にむけて、大都会に育まれるこの豊かな生命を大切に守り伝えることは勿論、百年がかりでこの鎮守の森をつくりあげた、明治の御代の先人達の叡智と志をこれから継承することも、今を生きる我々の大事な務めでしょう。昨年、この課題にヒントを与えて

くれるような書籍が二冊刊行となりました。

一冊目は、『会えなかった祖父の面影 「明治神宮の森」に生きる大溝勇 附…大溝家「父祖代々の歴史」です(図2)。

大溝勇は明治二十二年(一八八九)生まれ。大正三年(一九一四)に東京帝国大学農科大学(現東京大学農学部)林学科を卒業後、内務省明治神宮造営局の

技手を務めました。恩師である本多静六のもとで、明治神宮の境内

林苑造成に携わった人物です。その後、北海道庁拓殖部林業課を経て、大正十三年(一九

二四)に東京市公園課技術掛長の任に就きましたが、昭和三年(一九

二八)に肺炎のため急逝。享年満三十八歳。

短い生涯を都市の緑に捧げました。この度の

新著は、大溝勇の孫にあたる中澤滋子・青木

洋子姉妹が、祖父の足跡を訪ねた調査の成果を私家版としてまとめた労作です。



図1 現在の明治神宮 (明治神宮提供 航空写真家 野口克也氏撮影)

もう一冊は、本多静六にとっては学問の後継者にあたる方々が刊行した書籍『林苑計画書』から読み解く「明治神宮一〇〇年の森」です。著者は、「明治神宮とランドスケープ研究会」。日本造園学会の有志を中心とした研究グループで、同書はメンバー十二名の共同執筆による森のガイドブックです。筆者は仕事柄、この二冊の書籍



図2 中澤滋子・青木洋子
著『会えなかった祖父の面影「明治神宮の森」に生きる大溝勇』

の誕生に立ち会う機会に恵まれました。そこで本稿では、新刊紹介に事寄せて、先人の志を継ぐように活動と今後の可能性について話題提供ができればと思います。

一 子孫達の鎮座百年

■内務省明治神宮造営局にて

昨年は、鎮座百年の明治神宮を特集した新聞記事やテレビ番組を数多く目にしました。ここでは、人の手による鎮守の森づくりの担い手として、東京帝国大学農科大学の林学者の名が何度も登場しました。本多静六、本郷高德、そして上原敬二の三人です。明治天皇が崩御した明治四十五年（一九一二年）七月三十日、本多・本郷・上原はそれぞれ、四十六歳、三十四歳、二十三歳。ほぼ一回りずつ年が離れた師弟関係にあります。大



図3 東京帝国大学入学の記念撮影と思われる。明治44年9月。前列右から3人目が本多静六、前から2列目一番左が上原敬二、3列目右から4人目が大溝勇（中澤慶人氏所蔵）

正四年（一九一五）五月に設立した明治神宮造営局では、本多が参与、本郷、上原はそれぞれ技師、助手として任用され、林苑造成計画の最前線を与りました。

冒頭で紹介した大溝勇は、本多・本郷の教え子にして、上原敬二の同級にあたります（図3）。造営局の若き助手として、ともに活躍した人物ですが、短命ゆえにこれまでその仕事知られずいました。平成二十五年、筆者は曾孫・中澤慶人氏との出会いから、明治神宮のみならず東京の緑に尽

くした大溝勇に興味を抱きました。その後、令孫の中澤滋子・青木洋子姉妹や越澤明氏（北海道大学名誉教授）とともに大溝勇に関する勉強会を開始。昨年十月に姉妹が刊行した書籍は、その勉強会の成果報告書にもあたります。ここでは、大溝勇がどのように林苑造成に参与したか、明治神宮所蔵資料等を参考に具体的に考察を加えてみます。

■前域に「明るい気分」を演出

本多静六をはじめとする林学者達が、自ら手がけた明治神宮の森づくり計画について、その詳細をまとめた記録があります。それが『明治神宮御境内林苑計画』（以下、『林苑計画書』）で、原本は明治神宮ミュージアムに保存されています。執筆者は、本郷高德。彼らの理想は、将来は人為によらず自然の循環（天然更新）で繁茂する森をつくることでした。そのためには暖帯に属するこの土地に最適な樹種を選定する必要があります。このような考えから、明治神宮の森にふさわしい主林木は、カシ・シイ等の常緑広葉樹だという結論に至ります。『林苑計画書』に

は、百年を超える時間軸で天然林相を実現することをめざした遷移予測が見事に描かれています。

ところで『林苑計画書』では、明治神宮境内を七つの事業区に分け、区画ごとに実施計画を定めています（図4）。境内における各区の役割を明確化し、異なる植栽設計を用いるというゾーニングの手法です。明治神宮に残された造営時の記録によれば、大正五年（一九一六）九月に左記の通り各事業区及び業務別の担当者が決定しています（あくまで当時の割当てで、後に変更した可能性もあり）。

- ・ 一区 主任 高橋孝三郎 顧問 本郷高德
 - ・ 二区 主任 本多静六 補助 田村剛
 - ・ 四区 主任 川瀬善太郎
 - ・ 五区 主任 大溝勇
 - ・ 白金 主任 大溝勇
 - ・ 一般献木 主任 上原敬二
 - ・ 特別献木 主任 川瀬善太郎
- 「五区」は、原宿口から入った第一鳥居付近の広場を含む、いわゆる境内の前域に相当します。一方、「白金」とは旧白金火薬庫、現・自然教育園の土地のことで、この敷地に育つ大木を神宮境内に移植する作業を意味しました。この境

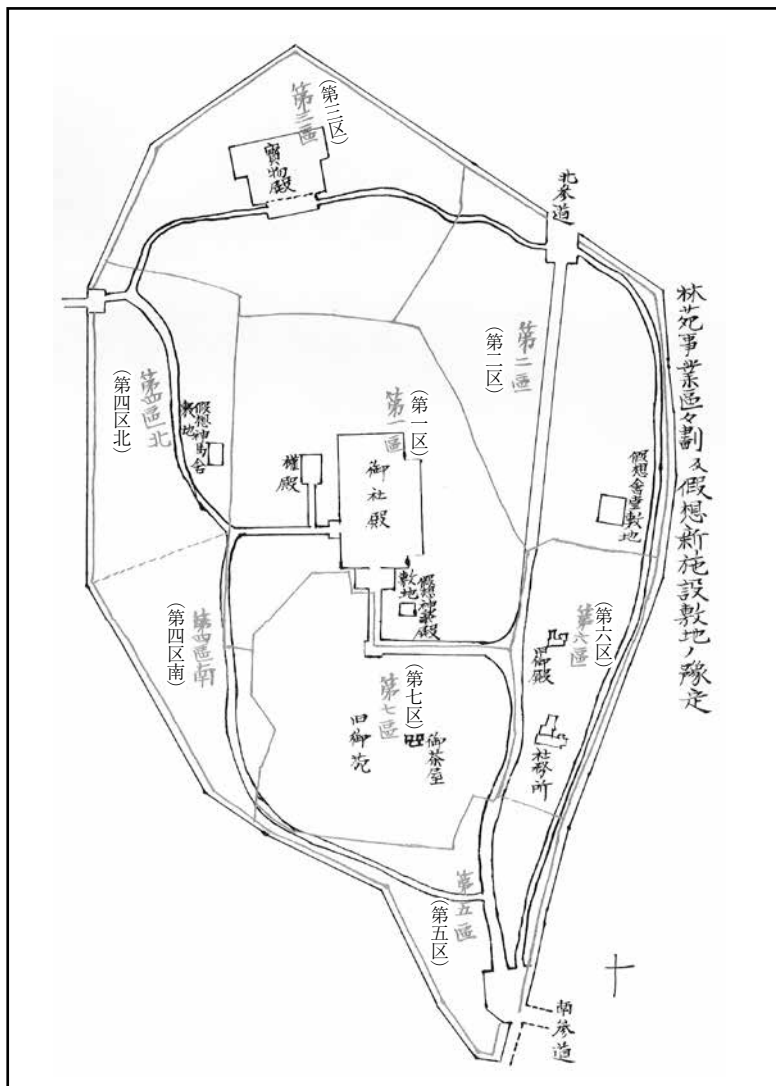


図4 林苑事業区の区割(『林苑計画書』)

内前域の整備と白金からの大木移植が、大溝勇の担当でした。そして、この二つの仕事は相互に関わりがあったようです。詳しく見ていきます。

『林苑計画書』は、境内における「五区」の役割を「神宮の表口たるべき」所であり、風致及び交通の両面で重要な地区と位置づけられています。しかし、問題がありました。明治神宮は、それまで皇室の御料地だった土地を主な敷地と

しましたが、五区は例外で、ここは代々木練兵場敷地の一部でした。それを、表参道から境内地への接続をスムーズにするため、陸軍省と交渉して新たに敷地に加えたという背景があります。つまり、この区域は元軍用地だったため「風致的価値」が皆無に等しく、ことごとく新規の植栽が必要でした。では、どのような風致が望ましいか。『林苑計画書』に曰く、境内の前域は、「中央部に比し幾分明る

き気分あらしむる」こと。訪れる人が参道を奥へと進むほどに、鬱蒼と繁る森の厳肅さを感じられるよう、導入部はむしろ「明るい気分」を醸す植栽にしようという発想です。この明るさの演出のため五区に施された工夫の一つが、神橋下を流れる清らかなせせらぎの水流設計であり、もう一つが紅葉美しい落葉広葉樹等、計画樹種とは異なる修景に配慮した樹木の配置だったのです。ここで、大溝勇が白金から移植する姿のよい大木が、大きな役割を果たすことになります。

■白金火薬庫跡からの大木移植

この移植については、大正九年(一九二〇)の鎮座にあわせ庭園協会が編纂した記録集『明治神宮』に、大溝勇自身が「内苑における大木の移植」と題して、その顛末を書き残しています。

明治神宮の森は、全国から寄せられた約十萬本の献木によってつ

くられたことはよく知られていません。正確には、九万五千五百五十九本。この献木を含め造営当時に林苑を構成した樹木の内訳は次の通りです(『林苑計画書』より)。

- ・在来木／一万三千二百九十二本(大正四年造営着手時、目通直径三寸以上のもの)
- ・献木／九万五千五百五十九本
- ・他官庁より譲受木／八千二百一十二本
- ・購入樹木／二千八百四十本

計 十一万九千九百一十三本

このうち、「他官庁からの譲受木」には、帝室林野管理局(宮内省)、農科大学(文部省)、山林局林業試験所(農商務省)からの譲受木その他、陸軍省が所管する白金火薬庫跡地から移植した樹木五百七十二本が含まれています(後に新根のモミジを加え計五百八十五本)。この白金の土地は、高松藩主松平家の下屋敷跡で、良樹巨木に富んでいました。

この白金からの大木移植は、ま

ず大正四年(一九一五)四月、移植樹の選定から始まり、五月初旬に「根廻」に着手。根廻とは、移植後の生存率を高めるため、あえて根を切り新たな細根を発生させる技法で、白金で行われ、以後保



図5 白金火薬庫跡からアカガシの大木を吊曳運搬する様子
上原敬二『樹木根廻運搬並移植法 訂補』
(高山房、昭和2年)より転載

護手入に二年を費やしました。かくて大正六年四月三日、搬入開始に至ります。この間移植(掘取・運搬・植栽)に従事した人員八千人、運搬に使役した牛百二十頭、馬約四百頭。全ての運搬が完了するまでに八十余日を要したといい、まさに大溝勇が記す如く、「樹木移植としては蓋し稀有の大工事」となりました。

大溝の記録によれば、白金からの運搬で最も多数の牛馬を要したのは、目通直径一尺五寸(約四十五センチ)高さ六間(十・八メー

トル)、枝張六間以上というアカガシの巨樹でした(図5)。白金からの移動距離は二里半(約十キロ)といいますが、夜十二時半の市電の終電から始発まで、夜間の作業に限られます。五月二十四日、牛六頭馬四頭で曳きはじめ第一夜は三の橋付近、第二夜に乃木坂上まで。植栽が終わったのは、実に翌月六日のことでした。

この稀有の大工事により、日本の移植技術は格段の進歩を遂げました。大溝とともにこの作業に携わった上原敬二は、『樹木根廻運搬並移植法』(大正七年)を著し、その成果を斯界に広げます。明治神宮造営事業が造園学発展の原動力になったといわれる所以です。

白金から運んだ六百本弱の行方ですが、五区では、カシ・シイ等の喬大な常緑広葉樹が広場周囲に植えられました。また、人工により溪流の風致をつくり出した神橋付近では、モミジの大木が今も我々の目を楽しませてくれますが、これも白金からの移植樹木です。なお、先ほどのアカガシは、北参道から第二鳥居に曲がる西北側、参道沿いに植えられています。

■林・苑をまとめた蔭の功労者

造営局での大溝勇の働きぶりについて貴重な証言が残っています。少し長いですが最後に紹介します。

同氏「大溝勇」は高木「二三」氏同様温和篤実の士で、ともども内苑造営完成、御鎮座の時まで勉励され、両氏の功績は大いなるものがあり、とくに華々しく表面には現れなかったけれども、林苑課における農、林二系統が最後まで破綻をきたすことなく、美事な統制下にその責務をはたし得たのは、全くこの両技手の蔭の努力と紳士的な態度にまつものが大きかったことは否めない。因に高木一三氏は内苑工事完成後東京高等蚕糸学校教授に転出されたが中道にして病没され、大溝勇氏は北海道庁技師に転出、ついで東京市技師になったが、これもまた病に倒れた。この林苑課の双璧が相ついで中道にして病没されたことはまことに惜しんでも余りあり、或いは内苑御造営時代における過労の結果ではないかと、今にして思われるのである。(田阪美德「明治神宮造営局時代」『折下吉延先生業績録』)



図6 明治神宮造営局林苑課の仲間達。大正6年4月
(後列左から)齊藤操政 大屋靈城 狩野力 高木一三
大溝勇 明石東 (前列左から)江口日出松 伊藤丑松
土佐林浩 高橋卯三郎。寺崎良策撮影(中澤慶人氏所蔵)

大溝が所属した造営局林苑課は、樹木を主とする区域を担当する部門と庭園的な区域を担当する部門とに分けられ、前者を「林の部」、後者を「苑の部」と称しました。本多を筆頭とする東京帝大林学系による林の部に対し、苑の部は同じく帝大で農業(園芸)を講じる原熙を中心に農学系が担当し、両者は競争的対立の関係にありました。そこで、大溝勇は林の側から高木一三は苑の側から、互いに技手として現場のまとめ役を全うするので。まさに「蔭の功労者」

でした(図6)。

大溝勇の親族は、昨年の自費出版に合わせて関連する所蔵写真をデジタル化しました。(図3)(図6)はその一部ですが、いずれも明治神宮には所蔵がない貴重資料です。計百七点に及ぶ写真資料目録は、筆者が所属する研究所が本年五月に刊行する研究所紀要『神園』に収録予定です。明治神宮のみならず都市の緑に尽くした当時の人物について、今後研究が進むことを願っています。

二 学知の継承者の鎮座百年

■明治神宮から造園の未来を問う



図7 明治神宮とランドスケープ研究会著『林苑計画書』から読み解く 明治神宮一〇〇年の森

明治神宮とランドスケープ研究会(以下、MLS研究会)の著作は、昨年末に刊行になりました(図7)。同会の発足は、六年前の

平成二十七年まで遡ります。当時、

二〇二〇年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて、新国立競技場の国際コンペが話題になる等、建築や都市計画の分野では活発な議論が行われていましたが、緑を扱う造園分野には目立った動きがありませんでした。二〇二〇年は、造園学発祥の地と称される明治神宮鎮座百年の年でもあります。この機会に、造園的な視点から明治神宮の森のあり方を考えるとともに、そこから都市空間における造園の未来を模索する活動ができないか——。現在代表を務める上田裕文氏(北海道大学准教授)の呼びかけに応えて、平成二十八年五月、造園関係者の有志が集い勉強会が始まりました。勝手に集まり勝手に明治神宮の将来を考える会ということで、当初は「勝手連」の呼び名がつけましたが、筆者も縁がありこの一員に加わることになりました。

まず、彼らが着目したのが『林苑計画書』でした。同書については、著者の本郷高德が、「もしこれ『林苑計画書』が他年造園学上の参考資料として学者の注意を惹くこともあれば、望外の欣である」と、自身の回顧録に記しています。

現代の造園関係者として、造営当時の思いや工夫を改めて検証し、

次の百年へとバトンを引き継ぎたい、それが上田氏らの考えでした。そこでMLS研究会では、ほぼ隔月で勉強会を重ね、『林苑計画書』の読み解きを進めました。この時、メンバーが分担して翻刻した現代仮名遣い版の『林苑計画書』は、既に『神園』二十二・二十三・二十四号に連載で公開されています(本稿での引用も、この翻刻版の表記に基づきました)。

■先駆者の苦心を追体験する

さらに、これまで二十回以上に及ぶ勉強会の成果をもとに、明治神宮国際神道文化研究所の出版助成を得てMLS研究会が刊行したのが、今回の書籍です。出版には、公益財団法人東京都公園協会が名乗りをあげていただきました。本書の目次は、以下の通りです。

- 第一章 前代未聞の神社を考える
- ・ 移り変わる森の姿
- ・ なぜ、代々木が選ばれたのか
- ・ どこに御社殿を定めるか
- 第二章 林苑の風景を作りこむ
- ・ 神社らしさを託されたアカマツ
- ・ 落葉樹と溪谷

- ・ サカキと防砂林と調整池
- ・ 芝生とピスタ
- ・ イヌツゲ
- ・ 御苑

第三章 一〇〇年後に向けて風景を育てる

- ・ 戦場のようであった献木の受け入れ現場
- ・ 森がひとり立ちするまでの撫育
- ・ 土壌は一日にしてならず
- ・ 水を制するものは森を制す
- ・ その後を託された技師たち

実は、この三章構成は『林苑計画書』の構成を踏襲しています。『林苑計画書』は総説の「境内林



図8 『林苑計画書』第二章に収録されている森の遷移予測図(明治神宮所蔵)

苑計画の「概要」に始まり、第一章の「林苑の設計」、第二章の「林苑計画の実施」、第三章の「林苑全体に通ずる将来の保護及び管理」、そして巻末の「献木在来種別表」からなります(図8)。第一章には森づくりの理念が、第二章には理念に基づきどのように森をつくるべきかという実施計画が、さらに第三章には、つくった森をどのように維持すべきかという、将来の森の管理に関わる提言が記されています。つまり、本書は『林苑計画書』の内容を現代の専門家ガイドに読み解きつつ、読者自身が森の今とこれからを考えるための手引書ともなっているのが特徴です。

■『林苑計画書』のバトンリレー

彼らの読み解きが多様で示唆に富むことは、執筆陣十二名の多彩な顔ぶれからも想像できます。また、その肩書を見ますと、まさに造園学の将来を担うべき「これから」の世代であることも頼もしく感じられます(図9)。

上田裕文 北海道大学准教授(森林美学・風景計画研究者)／水内祐輔 東京大学助教(造園学史・

風景計画研究者)／高橋靖一郎(株)LPD技術顧問(ランドスケープアーキテクト)／江尻(野田)晴美 樹木医事務所桔梗代表(樹木医)／寺田徹 東京大学准教授(緑地学研究者)／竹内智子 千葉大学准教授(都市緑地政策研究者)／田中伸彦 東海大学教授(自然活用計画・観光地管理研究者)／近藤真 パシフィックコンサルタンツ(株)(公園計画・設計者)／四戸秀和 愛媛大学特定助教(都市・地形形成史研究者)／小林邦隆 日本緑化センター副主任研究員(造園コンサルタント)／押田佳子 日本大学准教授(造園土木研究者)／小堀貴子 日本学術振興会特別研究員RPD(公園利用研究者)

例えば、大溝勇が担当した「五区」の計画を考察した緑地学研究者の寺田徹氏は、前域と奥の対比を意識した植栽法には、現在でいう環境心理学の視点が見て取れると指摘しています。同様に、大木の移植過程に着目した江尻(野田)晴美氏は、樹木医ならではの視点から明治神宮で用いられた移植技術の詳細を伝えてくれます。

本書刊行にあわせ、版元の東京

都公園協会の尽力により、日比谷公園にある緑と水の市民カレッジみどりのiプラザにて、「出版記念 本多静六展」が開催されました(令和二年十二月十七日～三年一月十六日)。ちなみに、同カレッジと明治神宮国際神道文化研究所とは一昨年に覚書を交わし、明治神宮の森づくりをテーマとした連続講座「2020明治神宮100年の森記念講座」を現在も共催中です。MLS研究会のメンバーには、この講座企画にも協力をいただいております、これもまた本多静六



図9 明治神宮とランドスケープ研究会のメンバーたち

達に結ばれた緑のご縁といえるでしょう。

むすびに

本稿では、鎮座百年を期して昨年刊行された書籍を事例として、「先人」の志を継ごうとする二つの試みを紹介しました。ともに「先人」に向き合う取り組みですが、一つ目は子孫、二つ目は学問の後継者がその担い手となっています。前者の活動により百年を経て整理公開された資料が、後者の調査研究に新たな素材や視点を提供するという相乗的な効果も期待されることです。

また、MLS研究会のメンバーは、本年七月に明治神宮で開催されるシンポジウムで、百年の森の「これから」について議論を展開する予定です。明治神宮の森が、広く緑に関わる専門家の方々とつて、まさに叡智と志の世代継承の場になればと願っています。おそらく、それは本多静六達の意にもかなっているのではないのでしょうか。

今、コロナ禍に息をひそめながら、百年の森の木の下でそのようなことを想っています。

本多家文書・最新の研究成果から

久喜市教育委員会では、本多家から市に寄贈された資料の研究を続けています。今回は、三人の学芸員の方から最新の研究成果をご寄稿頂きました。一件目は、本多博士がドイツ留学中に親交のあった人物とその写真入り名刺についての資料紹介です。二件目は、洪沢栄一と本多博士との共通点と特徴について。三件目は、本多博士の妻であった銚子の医師としての経歴及び診療の特徴についてです。

ドイツ留学期の写真 入り名刺について

久喜市教育委員会文化財保護課
主事兼学芸員 竹内 俊吾

久喜市教育委員会では本多家から寄贈いただいた資料を本多家文書として整理し、保管しています。本多家文書には、本多静六博士の原稿や書簡、写真、記録類のほか、養父晋の日記や妻銚子のノートなど、貴重な資料が多数あります。今回はこの内の写真資料の中から、本多博士がドイツに留学していた時期（明治二十三〜二十五年）の



ヒルトネル(本多家No.1506)

写真入り名刺について、裏書きなどから詳細のわかる人物を、写真の年代順に紹介します。



田原良純(本多家No.1481)



佐々木忠次郎(本多家No.1508)



後藤新平(本多家No.1511)

まず、一八九〇（明治二十三年）と書かれているのがヒルトネルとドイツ人の写真です。ヒルトネルはターラント山林学校で植物学の助手をしていた人物で、『洋行日誌』（本多静六通信第十号掲載）にも度々登場します。本多博士に押し葉を教え、度々一緒に散歩をしては植物を採集し、押し葉を作りました。

明治二十四年（一八九一）と書かれた写真は全て日本人留學生のもので、当時の欧州の社交界で広がっていた写真入り名刺を交換するという文化に倣い、日本人留學生も留学先で写真を撮って名刺交換をしていたことがわかります。

明治二十四年は本多博士がミュンヘン大学に在籍していた時期で、同じ頃にミュンヘン大学に留学していた田原良純、佐々木忠次郎、後藤新平の写真が残っています。田原良純は後に日本最初の薬学博士となった人物です。佐々木忠次郎は東京農林学校の教授で昆虫学を専門としていました。帰国後の農科大学教授陣の集合写真では、助教授となった本多博士と並んで写っています。後藤新平は後に内務大臣になる人物で、先に留学していた本多博士が世話をする形で



勝島仙之助(本多家No.1500)



柴田耕一(本多家No.1477)



向井哲吉(本多家No.1480)



東久世通敏(本多家No.1502)

親交が始まり、帰国後も長きに渡って親交がありました。

ミュンヘン大学以外の留學生では、勝島仙之助、柴田耕一、向井哲吉、東久世通敏の写真があります。勝島仙之助は東京農林学校の



岩佐新(本多家No.1503)



坪井次郎(本多家No.1505)

教授で、ベルリンの獣医学校に留学していました。本多博士とは同じ船で日本を出発し、フランスからドイツへの汽車では行動を共にしました。柴田耕一は帝国大学医科大学からベルリン大学への留学生と考えられる人物で、『婦人科準繩』という医学書の翻訳者として名前が残っています。向井哲吉は『洋行日誌』で向井某として度々登場するフライブルク鉱山学校の留学生と考えられ、八幡製鉄所の技師として名前が残っています。

東久世通敏は伯爵東久世通禧の次男で、ハレ大学に留学していました。三箇小学校にある「琢玉学校」の扁額は、東久世通禧が揮毫しており、これは本多博士が繋いで



ドイツ留学時代の本多静六

だご縁であると考えられます。明治二十五年(一八九二)と書かれているのは坪井次郎の写真です。坪井次郎はミュンヘン大学で衛生学を研究し、後に京都帝国大学医科大学の学長となりました。本多博士はミュンヘン大学卒業後に、坪井次郎の紹介で、イギリスに留学中の人類学者の坪井正五郎を訪ねています。

撮影時期は不明ですが、岩佐新と書かれた写真もドイツ留学期のものと考えられます。岩佐新は、『洋行日誌』の中で「最もドイツ通と称される岩佐氏」と評され、本多博士の演説試験を評価したことが紹介されています。

今回紹介した写真入り名刺は裏書きなどで詳細のわかるものに絞っており、本多家文書にはほかに多くの写真資料があります。今後引き続き整理していく中で新たな情報を公開していきたいと思えます。

本多静六と渋沢栄一

久喜市立郷土資料館

主事兼学芸員 星野 諒

文化財保護課及び郷土資料館では、学校や団体から依頼のあった各種講座の講師として、職員(学芸員)が出張講座に出向くことが

あります。テーマは市内の歴史や文化財に係るものがほとんどですが、その中で私は昨年度から久喜市市民大学一年生を対象とした公開講座「本多静六博士と渋沢栄一」の講師を務めております。今年度は新型コロナウイルスの影響もあり、市民大学の新一年生は六名と少なかったですが、公開講座は一般市民も参加できる講座のため、計二十二人の受講者に講座を行いました。単純に考えても、市民大学生の約三倍の一般市民の方々がこの講座に参加されており、やはり新一万円札の顔ともなる渋沢栄一と本多静六との関係性に対する世間の関心の高さがうかがえます。また、本多静六についての講座で渋沢栄一の話絡めると、必ずといって良いほど二人の関係について質問が飛んできます。

本多静六と渋沢栄一との関係性

については、『百五十年記念誌』や過去の本多静六通信でも度々取り上げられていますが、ここでは世間の渋沢栄一への注目をふまえ、改めて二人の接点や関係性について、例をあげながらご紹介したいと思います。

■苦学生時代の思い出

まず、本多静六(当時は折原静六)が最初に渋沢栄一にコンタクトを試みたのは、十五・六歳の頃のことでした。深川の渋沢邸の玄関番をしていた義兄・藤村久を頼って、学問の世話を受けようと渋沢家の門を叩いたそうです。ところが二度訪問して、二回とも門前払いにあい、そのときの憤慨は甚だしく、後に静六は「二度と渋沢の門なぞ、くぐるものかと決心して以来東京で駒場の学校を卒業する迄一度も渋沢さんの厄介にはならなかった」と回想しています。



渋沢栄一

■本多家と渋沢栄一

その後、静六は大学在学中、元幕臣の本多家に婿入りしますが、実はこの本多家と渋沢栄一にも少なからず縁があります。

静六の養父本多晋はかつて彰義隊の幹事を務めており、当時、彰義隊頭取の役職には渋沢栄一の従兄にあたる渋沢成一郎が就いていました。渋沢成一郎は渋沢栄一とともに一橋家の家臣となり、徳川慶喜に仕えた人物です。本多晋が彰義隊の幹事だった頃、渋沢栄一は慶喜の弟昭武に随伴し、フランスのパリへ長期留学中（約一年半）でした。もし渋沢栄一が日本にいれば、両者は旧幕府軍として共闘していたことでしょう。



本多晋

■埼玉学生誘掖会の設立・運営

静六は大学卒業とほぼ同時期に、本多家の資金援助を受け、二年間のドイツ留学をします。帰国後は帝国大学農科大学（後の東京帝国

大学農学部）の助教に就任しました。その後、森林や公園の整備を中心に、様々な事業を手がけることとなりますが、渋沢栄一とともに携わった事業も少なくなく、代表的なものとしては鉄道防雪林の設置や秩父セメントの設立などが挙げられます。中でも、生涯を通じて携わることになった事業が埼玉学生誘掖会の設立・運営でした。

埼玉学生誘掖会は渋沢栄一を会頭として、明治三十五年（一九〇二）に埼玉県出身の各界で活躍する人々に組織された民間団体で、埼玉県出身学生のための寄宿舎設置や奨学金貸与など学生支援事業を展開しました。苦学生時代の経験から、静六はこうした育英事業に積極的で、埼玉の実業家たちに声をかけて賛同を得ていました。しかし、渋沢は当初、資金繰りの見通しの悪いこの事業に乗り気ではなく、出資には消極的でした。渋沢の援助が不可欠な状況で静六は、明治三十三年（一九〇〇）、当時の年収の三分の一にあたる三〇〇円を懐に入れ、深川の渋沢邸に直談判に伺います。静六は玄関脇で渋沢との面会を待ち、深夜の十一時まで粘ってようやく面会にこ

ぎつけました。出資を渋る渋沢に、設立基金として自身の三〇〇円を差し出すと、渋沢もその心意気に感心し、支援・協力を約束しました。

その後、渋沢は生涯誘掖会の会頭を務め、学生寄宿舎で行われる行事にはほとんど参加し、学生と交流を深めたそうです。静六も理事や副会頭を務め、渋沢の亡き後は第二代会頭に就任しました。後に静六は渋沢のことを「最初のとっつきは非常に冷淡な感じを受けますが、一旦話が分かったとなると真心をこめて尽して下さる人でした」と評しています。

■おわりに

昨年度から「本多静六博士と渋沢栄一」の講座を受け持つことを機に、二人の関係について学び直したところ、二人の共通点や特徴を整理することができたように思います。簡単に列挙してみると、まず両者は長期の海外留学を経験しており、時代の転換期であった日本に欧米の思想・技術を巧みにとり入れたということです。また、両者は新時代における資金・資本の重要性を理解しており、事業を手がけるにあたっては、自立した経済基盤を確保していました。そ

して何より、手がける事業の目的が「私利」ではなく「公益」であることを重要視していた、ということが挙げられます。当然、学問の基盤が異なる両者の思想には細かな相違が認められますが、同時代を生きた二人が日本を発展させるべく多くの事業で協働していく上で、こうした共通点や思想の近さは、二人の親交を結びつけた大きな理由の一つだといえるでしょう。

本多静六を支えた妻
銚子の医業活動について

久喜市立郷土資料館

副館長兼学芸員 栗原 史郎

本多静六を支えた妻銚子（一八六四～一九二一）については、本通信第二十四号及び『百五十周年記念誌』で紹介しましたが、今回は銚子の医師としての経歴及び診療の特色等にスポットを当て改めて紹介いたします。

■医師としての経歴

銚子は、明治十四年（一八八二）から女医になるべく、後の海軍軍医総監高木兼寛が創立した成医会講習所（東京慈恵会医科大学の前

身)の別科生に抜擢されました。これは英国留学から帰国した高木が当時の日本の女子に近代医学を修得する能力があるかどうかを試す意味もあって、東京女学校(竹橋女学校)から二人の才媛、松浦里子と銚子を選び入学させたことによるものです。

当時女性が医師になることは困難でしたが、銚子は高木兼寛、實吉安純両医師について解剖その他の実地研究をなし、終に医学全科を卒業。明治二十一年(一八八八)、二十四歳の時に、医術開業試験後期試験に及第し我が国における第四番目の公認女医となりました。なお、松浦里子は明治十八年に医術開業試験前期試験に合格しましたが、肺結核の病状がすすみ、後期試験を受けることができず医師を断念。看護婦に転身しています。

翌明治二十二年、銚子は婚養子として静六を迎えて家庭生活に入りましたが、その年より芝区新堀町の自宅に医業を開業し広く内外の診察にあたりました。明治二十三年三月、静六のドイツ留学後は一層医業に励み、その傍ら慈恵医院に婦人科の診察を手伝い、横浜フェリス女学校に衛生学を講じ、慈恵医院の看護婦養成所の講義を

受け持つなど多忙を極めました。

また、明治天皇第六皇女常宮昌子内親王殿下の侍医も務めています。同年一月末に長女が生まれたばかりで大変な時期でしたが、充実した生活ぶりでした。ちなみに慈恵医院の婦人科は、明治二十二年九月に院長の高木兼寛により新設された診療科目で、その主任には同年ペンシルベニア女子医科大学を卒業した洋行帰りの女医、岡見京子が抜擢、招聘されていました。

銚子は岡見京子とは旧知の間柄で、週に二回は慈恵医院で京子の助手として診療を手伝いました。また、慈恵病院の看護婦教育所には看護婦取締として松浦里子が勤務していました。三人とも敬虔なキリスト教徒であったことから、信仰について語り合うこともあったと思われまます。

明治二十五年(一八九二)、静六の帰朝後、銚子は夫に随い駒場農科大学(現在の東京大学教養学部)の官舎に引き移り、やむを得ない依頼の外は診察しませんでした。が、医業を捨て去ることはできず、赤坂新坂町に診療所を設け、駒場より人力車で毎日出勤し、治療するようにになりました。しかし銚子は、「妊娠して御殿を下りた後は其の



本多銚子
(東京慈恵会医科大学病院提供)

業を廃した」(明治二十九年四月九日『報知新聞「女医の現況」』)とあり、この頃診療所を閉じました。

■診療方針

銚子が医師として最も得意とした診療科目は、婦人病(子宮病)と小児科でした。銚子の診療方針は、境遇のよい人からは普通の治療を受け、困る人からは軽減するというものでした。

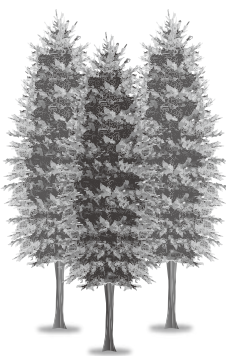
当時の記録には「婦人と小児に限り一切無料で診察して処方箋を出し、しかも通常の半額すなわち一日分四銭で施薬し、貧困者に限り無料で与えた。」(『女学雑誌』第一八三号、明治二十二年)とか、「その薬価は上中下の三等に分け、患者の分限により随意に納めさせた。往診は遠近に係らず車代を受

けず、かつ貧困者には博く施療をした。」(明治二十五年十月十五日『毎日新聞』)とみえます。

■医者としての心構え

銚子は彼女に私淑していた井出(竹内)

茂代に「医者はそれに精神を打ち込んで専門にせねば、出来ぬことである。家庭に入りこんでの傍ら仕事では駄目だ。」とか「医者はどこまでも「対人信用」が大切で、決して立派な家の構えによるものではない。」(『日本女医史』秋山龍三著、昭和三十七年)と語っています。銚子は家庭の都合で医業を止めざるを得なかったわけですが、もし医業を続けることが出来れば、きっと立派な医師として多くの人に愛されたことでしょう。



第十三回本多静六賞
受賞者の紹介

埼玉県農林部森づくり課

技師 穂積 由乃

一 第十三回（令和元年度）

本多静六賞について

県では、本県出身で日本最初の林学博士となった本多静六博士の精神を受け継ぎ、緑と共生する社会づくりに貢献した個人・団体を、平成十九年度から表彰しています。

第十三回本多静六賞については、計十三件（個人七件、団体六件）の応募があり、前ときがわ町長関口定男氏が受賞されましたので御紹介いたします。



第十三回本多静六賞受賞者
関口 定男氏

二 関口定男氏の経歴と功績
経歴

関口氏は、町の面積の約七割が森林であるときがわ町の町長で

あり、平成三十年に町長を退任後は森林組合の顧問を務めておられます。

■功績

材木商、建設業の経営で培った知見を生かし、町長として、耐震改修と内装木質化を組み合わせた「ときがわ方式」による木の学校づくりを実践し、学習環境を整備するとともに、木育の推進に取り組みされました。



「ときがわ方式」による木の学校
(ときがわ町立都幾川中学校)

また、公共施設における木材利用について、木材を供給する山側から、都市部に積極的に働きかけ、

森林資源の循環利用に貢献されました。県内の市町村が、「公共建築物等木材利用促進法」に基づき方針を策定する際には、多くの自治体が支援し、公共施設での木材利用が前進しました。



公共施設での木材利用
(川島町役場庁舎)

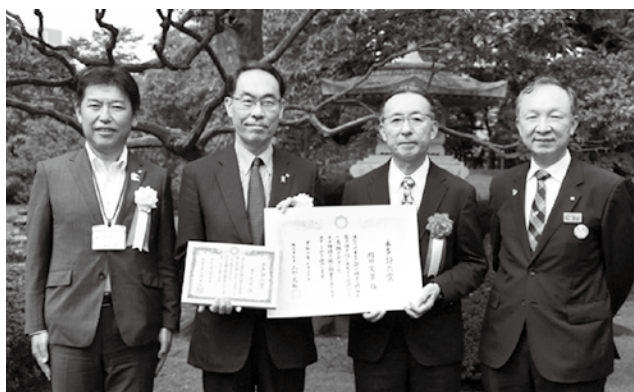
さらに、人工林が本格的な利用期を迎える中、県内外問わず、地域産木材の利活用に関する講演を行い、森林組合の顧問となった現在も「木を使う」ことの重要性を発信しております。

三 本多静六賞表彰式

表彰式は、令和二年七月三十日

に知事公館で行い、大野元裕埼玉県知事から、関口氏に表彰状と賞金、記念品が贈られました。

関口氏からは、木材利用がもたらす環境・地域振興への効果について、内装木質化の事例と併せて、紹介していただきました。



表彰式の様子

四 終わりに

県では本多静六賞の表彰を通じて、博士を顕彰するとともに、緑と共生する社会づくりに取り組んでいきます。

引き続き皆様の御理解・御支援をお願いいたします。

コロナ禍に想う 本多博士の「生活流儀」

本多静六博士を顕彰する会
副会長 渋谷 克美

令和二年四月の朝日新聞『日曜に想う』の欄で、新型コロナウイルス感染症拡大に関連して、緊急時に「人にものを頼み任せることがいかに大切で難しいか」を、高橋是清と辰野金吾、後藤新平、そして本多静六の四名をとりあげ、夫々が大事業を任せたり任されたりした事例を教訓として紹介したコラムがありました。

本多静六が辰野金吾からは日比谷公園の設計を、後藤新平からは関東大震災後の帝都復興計画の原案づくりを任された有名な話です。コラムでは最後に「危機と復興への想像力、人に大事を任せる人を動かす信念と言葉、そして泰然自然若として目標に向かう努力。それらはみな、悲観や絶望の淵から今日の我々を救う力になるだろう」と結んでいました。

八十五歳まで現役を貫いた本多静六は、百二十歳まで生きる目標を立て、その健康長寿の秘訣を著

書『私の生活流儀』で披露しています。今日のコロナ禍での、もの考え方、生き方にも通じるものが感じられます。

■ままならぬ世をままにする法

本多静六は、ままならぬ世の中を嘆いても始まらない。ままにする秘法はただ一つ。「この世の中を、ままならぬまま、在るがままに観じて、避けず、おそれず、自らの努力を、これに適応させていくことである」とし、「環境を支配することは、偉大な天才にもなかなか難しいが、環境に適応することは凡人にもさして難事ではない」としています。

さらに、このコロナ禍を想定していたかのように、「いつの世にも、根本的な重大問題は山積している。個人の力ではどうにもならぬ難問が立ちほだかっている。しかしながら、各人各個人の心掛け次第で、それも順次に取り崩していけぬものではない。『心掛ける』といった小さな力でも、一人の心掛けが十人の心掛けになり、十人の心掛けが百人の心掛けになれば、やがては、千人、万人の大きな力ともなる。(中略) いかにままならぬ世の中と申しても、百万人の力、千万

人の力で、これを少しでもままになるほうへもつていけぬということはあるまい。必ずしもつていける。必ずよりよき変化は期待し得られる。私はさよう信じてうたがわな

編集後記

今回は本多博士の代名詞とも言

■本多流「ちよつとした病氣対策」
コロナ感染対策には免疫力を高めることも大切だと言われている。本多流「ちよつとした病氣対策」の極意をご紹介します。

大病以外はいちいち医者にかからない。万病の基になる風邪には常に用心深くする。薄着の習慣をつけ、汗をかいたら直ぐに着替える。間食はしない。三食腹を減らして美味しく食べる。食べ過ぎた

と思えば、茶碗半分の飯でも残す。大食主義の「腹八分目」。義理にでも頂かなければならないものは遠慮なく貰って帰る。そして極めつけは、公園設計のポリシーでもある「絶えず新鮮な空気を吸い、十分な日光に浴し、いつも食事をうまく食うという三要点」であるとしています。

造林学や公園設計等といった専門分野とは別の本多静六の素顔ともいえる生活の様子が目に浮かぶようです。

今回は本多博士の代名詞とも言
うべきイチョウについてのお話です。イチョウは中国原産で室町時代に日本に伝わったとされています。漢字では銀杏・公孫樹・鴨脚樹等と書きます。鴨脚樹とは葉の形が鴨の脚に似ているからだそうです。イチョウの中には、葉の上

【編集発行】

本多静六博士を顕彰する会 (窓口左記)
久喜市市役所企画政策課
〒346-8501 久喜市下早見85-3
電話 〇四八〇(二二)一一一(代)
久喜市萱蒲総合支所総務管理課
電話 〇四八〇(八五)一一一(代)